

一人称主語の「～(ヨ)ウトシテイル」における 世代差 －視点の観点から－

國澤 里美

キーワード ～(ヨ)ウトシテイル、人称、視座、注視点、世代差

1. はじめに

本稿は「～(ヨ)ウトシテイル」の用法について論じたものである。動作主が三人称の場合は(1)のように自然であるが、動作主が一人称の場合は(2)のように不自然だと思われる。

- (1) 彼は本を読もうとしている。
(2)? (私は) 本を読もうとしている。

しかし、筆者が日本語母語話者150名を対象に行ったアンケート調査によると、表1のように世代が下がるほど(3)のような「～(ヨ)ウトシテイル」の許容度が高くなる傾向が見られた。

(3)調査17

- A 「先週貸した本、もう読んだ？」
B 「ごめん。忙しくて、まだ。(私は) 読もうとして(い)るんだけど…。」

表1 例(3)が言えると判断した人数と割合

10代	20代	30代	40代	50代以上
19名 (63%)	17名 (57%)	13名 (43%)	12名 (40%)	9名 (30%)

本稿は、「～(ヨ)ウトシテイル」は動作主が一人称の場合は不自然であるという人称制限を認め、その許容度に世代による違いがあることを指摘する。

まず日本語の人称制限について確認する。願望を表す「～たい」は(4)のよう

に、動作主が一人称の場合は自然な文であるが、三人称の場合は非文である。動作主が三人称の場合は(5)のように「～たがる」を用いる。「テイル」を用いた場合も(6)のように、動作主が一人称の場合は非文で、三人称の場合は自然な文である。

- (4) {私／*彼} は本が読みたい。
 (5) {*私／彼} は本を読みたがる。
 (6) {*私／彼} は本を読みたがっている。

本稿の考察対象である「～(ヨ)ウトシテイル」にも、「～たい」と同様に人称制限が見られる。つまり、動作主が一人称の場合は(7)のように「～(ヨ)ウ」という形をとり、動作主が三人称の場合は(8)のように「～(ヨ)ウトスル」という形をとるという違いがある。この人称制限は、願望を表す「～たい」と共通している。

- (7) 私は本を {読もう／?読もうとする}。
 (8) 彼は本を {*読もう／読もうとする}。

また、(9)のように「テイル」を用いた場合、動作主が三人称の場合は自然な文であるが、動作主が一人称の場合の許容度には世代差が見られる。

- (9) {?私／彼} は本を読もうとしている。

(9)において世代が下がるほど一人称主語の許容度が上がるのは、三人称主語の場合と同様の解釈を行っているためであると考えられる。そして、その解釈には「視点」が関わる。

本稿は「視点」について、対象をながめる位置である「視座」と見られる対象である「注視点」を区別して考える。(9)において三人称主語の場合、「私」の視座から本を読もうとしている「彼」を観察している。世代が下がるほど、一人称主語の許容度が上がるのは、一人称主語においても三人称の場合と同様に解釈しているためであると考えられる。つまり、「私」の視座から本を読もうとしている「私」を観察しているのである。

また、(9)の一人称主語の許容度が上がる理由として、「客観的表現」とされる「テイル」の使用による可能性も考えられる。

本稿はアンケートの結果から、(9)のような動作主が一人称における「～(ヨ)

ウトシテイル」について、世代が下がるほど許容度が上がるという世代差を指摘する。そして、その許容度には対象をどのように観察するかという「視点」が関わっていると考え、「視座」と「注視点」の観点から考察する。

2. 先行研究と本稿の立場

2.1 「～(ヨ)ウトシテイル」の人称制限

「～(ヨ)ウトシテイル」の人称制限について、永井(1997)は一人称であっても過去の事実を述べる場合には許容されると認め、竹村(2004)は過去の事実でなくても許容される場合があることを認めている。永井(1997)は(10)のように「～(ヨ)ウトシテイル」が一人称の文に使われると不自然になると指摘している(二重下線は引用者による)。

(10) ? 皆にじゃまされても、私は意地でも教室に入ろうとする。

(11) 皆にじゃまされても、彼は意地でも教室に入ろうとする。

ただし、一人称であっても(12)のように「過去の事実を客観的に描写する場合」は「～(ヨ)ウトシタ」を用いるようであると述べている。

(12) 皆にじゃまされても、私は意地でも教室に入ろうとした。

一方、竹村(2004)は、一人称の(13)は三人称の(14)に比べて不自然であると述べている。

(13) ? 私は行こうとしている。

(14) 彼は行こうとしている。

竹村(2004)は、一人称であっても「自分を客観視している場合には使えると思われる」と述べている。しかし、「自分を客観視する」とはどういうことかについての説明はなされていない。

永井(1997)が指摘するように、話し手自身について述べる場合であっても過去の内容であれば、「視座」である「発話時の私」から、「注視点」である「過去の私」を観察することが可能である。また、竹村(2004)が指摘するように「自分を客観視する」場合に許容度が上がることも「視座」と「注視点」とい

う概念を使って説明することができる。次に、本稿における「視座」と「注視点」を確認し、一人称における「客観視」について定義する。

2. 2 「視座」「注視点」と「客観視」

本稿は「視点」について、「視座」と「注視点」を区別して考える。「視座」とは対象をながめる位置であり、「注視点」とは見られる対象であるため、この2つは異なるものである。本稿は、茂呂(1985)にならって「視点」は「視点人物」、「視座」、「注視点」、「見え」の4つの要素からなると考える。それぞれについて以下のように定義する。

- 「視点人物」：「だれが見るのか」の〈だれ〉
 「視座」：「どこから見ているのか」の〈どこ〉
 「注視点」：「どこを見ているのか」の〈どこ〉
 「見え」：見えたこと

池上(2005:16)は、認知言語学の立場から「自己の客体化」について次のように述べている。

鏡に映った他者の姿がその他者本人であると確認できるのと同じように、鏡に映った自己の姿は他ならぬ自己の客体化されたものという認識が出来上がれば、(中略)客体化された自己を他者と見做し、自己が自己に働きかけるという認知的な構図も十分可能になる。

これを本稿の立場から説明すると、鏡の前に今いる私が「視座」であり、鏡に映った話し手の姿が「注視点」である。

次に、「視点」に関わる「感情移入」と「客観視」について定義する。

- 「感情移入」：話し手の「視座」から対象を観察すること
 「客観視」：話し手以外の人物の「視座」から対象を観察すること

本稿の考察対象である一人称における「客観視」について、次のように述べることができる。

「一人称の客観視」：話し手₁の「視座」から話し手₂を観察すること

動作主が一人称の場合、話し手が自分自身を観察対象にしているので、「視座」は話し手₁であり、「注視点」は話し手₂である。一人称主語の「～(ヨ)ウトシテイル」が許容されるのは、話し手自身について述べる場合であっても、それがあたかも他者のことであるかのように観察する傾向のためであると考えられる。

2. 3 「～(ヨ)ウトシテイル」の意味

ここでは「～(ヨ)ウトシテイル」の意味を確認する。永井(1997)は「～(ヨ)ウトスル」を次の4つに分類している。(15)のような「直前」、(16)のような「努力・意図」、(17)のような「習性・傾向」、(18)のような「目的・意図の提示」である。そして「直前」と「努力・意図」を「～(ヨ)ウトスル」の代表的な用法と述べている。永井(1997)は(15)のような「直前」について「ある動作が行なわれる直前、ある状態になる直前であることを表す」とし、(16)のような「努力・意図」を「何かの実現を目指した行動をとっている」意味であると述べている。

(15) 赤ん坊が今生まれようとしている。

(16) 皆にじゃまされても、彼は意地でも教室に入ろうとする。 (=例11)

また、永井(1997)は(17)のような「習性・傾向」は「ある状況下で常にある結果になる」ことを表す場合があるとし、(18)のような「目的・意図の提示」については「ある事物を主題にし、それが何を目指したものなのか」を述べるとしている。

(17) 人は自分だけの領分を持とうとする。

(18) 人格テスト・質問紙法…いろいろな状況下の行動特性に関する多数の質問項目を与えて、自己評価を行わせて、この自己評価を統計的に整理して客観像を描き出そうとする。

本稿は、「～(ヨ)ウトスル」の基本的な意味は「まさに動作を起こさんとしていることが第三者から見て明らかな様子」であり、それが文脈によって、「直前」「努力・意図」「習性・傾向」「目的・意図の提示」といった意味を持つと考える。そして、「テイル」を用いた「～(ヨ)ウトシテイル」は、「まさに動作を起こさんとしていることが第三者から見て明らかな様子」であることを「報告」する形式であると考えられる。

3. 本稿の仮説

筆者は一人称主語における「～(ヨ)ウトスル」の許容度を調べるために日本語母語話者150名を対象にアンケート調査を行った。その結果、一般に「～(ヨ)ウトシテイル」は一人称主語をとらないとされているが、世代が下がるほど(19)のように動作主が一人称の「～(ヨ)ウトシテイル」が許容される傾向が見られた。

(19)? (私は)本を読もうとしている。(=例2)

(20) 彼は本を読もうとしている。(=例1)

本稿は世代が下がるほど(20)と同様の解釈を(19)においても行っていると考える。すなわち、(20)のように第三者である「彼」を観察した結果、「本を読もうとしている」と報告しているのと同様に、(19)においても話し手は「私(自身)」を観察した結果、「本を読もうとしている」と報告しているのである。世代が下がるほど、話し手自身のことであってもまるで第三者のことであるかのように客観的に捉え、自分自身を観察対象とする傾向があると予測される。

本稿は、「世代が下がるほど、動作主が一人称において『～(ヨ)ウトシテイル』が許容されるのは、話し手が自分自身を観察対象とするためである」という仮説をもとに、「視座」と「注視点」の観点から「～(ヨ)ウトシテイル」について考察する。

4. アンケート調査

一人称主語の「～(ヨ)ウトシテイル」における許容度の違いを検証するため、日本語母語話者150名を対象にアンケート調査を行った(資料1参照)。150名の内訳は10代30名、20代30名、30代30名、40代30名、50代以上30名(50代15名、60代15名)である。¹アンケートは全部で20問である。「～(ヨ)ウトシテイル」の許容度を変える要因を考察するために、主節か従属節か、発話時現在か過去か未来か、恒常的な出来事か一度限りの出来事か、意志性があるかないか、努力をしているか放棄したか、などによって文脈を変えて調査項目を決定した。そして、「～(ヨ)ウトシテイル」との比較のために「～(ヨ)ウトスル」「～(ヨ)ウトシタ」「～(ヨ)ウトシテイタ」についても調査を行った。例文は全て筆者

の作例で、会話場面である。それぞれの場面において「ヨウトスル」形式²が言えるかどうかを判断してもらい、言えると思うものには○、言えないと思うものには×、判断に迷うものには△を書いてもらった。その結果を表2に示す。表2は「ヨウトスル」形式が言えると判断された割合が高い順に並べたものである。

表2の「主」は主節で用いられる場合であり、「従」は従属節で用いられる場合である。また、「スル」は「～(ヨ)ウトスル」、「テイル」は「～(ヨ)ウトシテイル」、「シタ」は「～(ヨ)ウトシタ」、「テイタ」は「～(ヨ)ウトシテイタ」についての項目である。

表2 日本語母語話者150名の一人称+「ヨウトスル」形式の許容度

順	調査			○	△	×	順	調査			○	△	×
1	従	テイル	7	83%	11%	6%	11	主	スル	2	64%	9%	27%
2	従	テイル	6	81%	7%	12%	12	主	テイル	11	59%	14%	27%
3	従	テイル	5	77%	7%	17%	13	主	スル	4	49%	15%	36%
4	従	テイル	13	75%	9%	15%	14	従	テイル	17	47%	13%	40%
5	従	スル	12	73%	7%	20%	15	従	テイル	9	46%	16%	38%
6	従	テイタ	16	73%	9%	18%	16	従	テイタ	18	45%	12%	43%
7	従	テイタ	20	73%	10%	17%	17	従	テイタ	19	39%	13%	47%
8	従	テイル	14	71%	11%	19%	18	従	テイル	15	39%	12%	49%
9	従	テイル	1	70%	8%	22%	19	主	スル	3	8%	7%	85%
10	従	シタ	10	68%	8%	24%	20	従	スル	8	5%	11%	84%

(「調査」の数字=アンケート調査の例文番号)

5. 結果と考察(1)－主節で用いられる場合－

永井(1997)は実際の用例では「～ようとする」という基本形で使われることは少なく、「～ようとして」「～ようとしたら」などの変化した形の例が多いと指摘している。筆者は、主節で用いられる場合について4問、従属節で用いられる場合について16問の調査を行った。その結果、主節の「～(ヨ)ウトシテイル」は世代によって許容度が異なることが分かった。また、従属節であっても主節に近い場合は同様の傾向が見られた。5節では主節における「ヨウトスル」形式について考察し、6節では従属節における「ヨウトスル」形式について

て考察する。

5. 1 主節の「～(ヨ)ウトスル」

まず調査対象者全150名における「～(ヨ)ウトスル」の許容度について考察し、次に世代差が見られた場合について考察する。

5. 1. 1 調査対象者全150名における結果

主節で用いられる「～(ヨ)ウトスル」について⑴～⑶の3項目を調査した。「～(ヨ)ウトスル」が言えると判断したのは、⑴は150名中96名(64.0%)であり、⑵は74名(49.3%)、⑶は12名(8.0%)であった。

(1) A「お金に困りそうだと思ったらどうする？」

B「(私は)節約はしないで、もっと稼ごうとする。」

調査2 (全体：○64.0%、△9.3%、×26.7%)

(2) A「すごく疲れた時、どうやってストレス解消するの？」

B「(私は)無意識のうちにカラオケに行こうとする。」

調査4 (全体：○49.3%、△14.7%、×36.0%)

(3) A「すごく疲れた時、どうやってストレス解消するの？」

B「(私は)カラオケに行こうとする。」

調査3 (全体：○8.0%、△6.7%、×85.3%)

今回の調査において、主節で用いられる「～(ヨ)ウトスル」の許容度は全20項目の中で高いとは言えない。しかし調査結果から、動作主が一人称の場合でも主節の「～(ヨ)ウトスル」は許容されうることが観察された。

⑵のように話し手Bが「無意識の状態である自分」の行動について述べている場合に比べて、⑶のように「無意識」でない場合は許容度が下がる。本稿は、⑵に比べて⑶の許容度が低いのは、⑶は「視座」と「注視点」の2つを設定しにくいためであると考えられる。また、⑵において許容度に世代差が見られた。次に、世代差が表れた場合について考察する。

5. 1. 2 許容度に世代差が見られる場合

アンケート結果から主節における「～(ヨ)ウトスル」の許容度に世代差が見られた。ここでは世代によって「視座」と「注視点」が異なるためであるという仮説をもとに調査結果を見ていく。

⑴が言えると判断したのは、10代は30名中17人(56.7%)であったのに対し

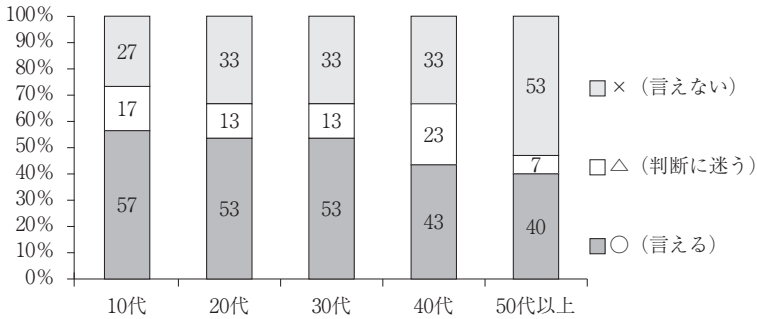
て50代以上は12名（40.0%）であり、世代が下がるほど許容度が上がる。

(24) 調査4（=例22）

A 「すごく疲れた時、どうやってストレス解消するの？」

B 「(私は) 無意識のうちにカラオケに行こうとする。」

図1 例(24)の許容度



自分の意志でコントロールできない「無意識」の状態である「私」は、発話時現在の「私」と異なる存在であると考えることができる。(24)は(25)のように解釈できる。

(25) 私₁は〔無意識の状態である私₂がカラオケに行くために動作をおこさんとする〕ことを観察した。

(25)において、対象を見る側である「視座」は私₁にあり、見られる側である「注視点」は私₂にある。(25)と構造が同じものとして(26a)と(26b)の2つが考えられる。

(26a) 私₁は〔彼₂がカラオケに行くために動作をおこさんとする〕ことを観察した。

(26b) 彼₁は〔私₂がカラオケに行くために動作をおこさんとする〕ことを観察した。

(26a)の構造を使って(25)を説明すると、第三者である彼を観察対象とするのと同

様に私₂を見ていると言える。(26a)は話し手自身を観察対象としており、「注視点」が移動していると解釈できる。

また、(26b)の構造を使って(25)を説明することもできるだろう。第三者的な立場である私₁の視座から私₂を観察していると考えられる場合は、「視座」が移動していると解釈できる。

世代が下がるほど(24)のような「～(ヨ)ウトスル」が許容される傾向にあるのは、話し手自身について述べる場合であってもそれがまるで第三者のことであるかのように言い、自分の状況を第三者的な立場から説明することで、聞き手の理解を求めやすくする狙いがあると考えられる。(24)のような「無意識の私」であれば、「私」の「視座」や「注視点」が移動しやすくなると思われる。

5. 2 主節の「～(ヨ)ウトシテイル」

ここでは、主節で用いられる「～(ヨ)ウトシテイル」について述べる。(27)が言えると判断したのは調査対象者全150名中89名(59.3%)であった。

(27) 場面：携帯に電話がかかってきて

A「もしもし。今、家？ごはん、食べた？」

B「ううん、まだ。(私は)今から、食べようとして(いる)。」

調査11 (全体：○59.3%、△14.0%、×26.7%)

(27)は聞き手Aの質問に対して話し手であるB自身について報告することが求められている場面である。主節であっても自分の状況を報告する場面において「～(ヨ)ウトシテイル」は許容されうる。

6. 結果と考察(2)－従属節で用いられる場合－

調査項目全20問中、調査対象者全150名において許容度が高かったのは、「～(ヨ)ウトシテイル」が名詞節、ノダ節、時節などの従属節において用いられる場合であった。ここでは従属節の場合について見ていく。

6. 1 従属節の「～(ヨ)ウトスル」

従属節で用いられる「～(ヨ)ウトスル」については、世代を通して同じ傾向が見られた。恒常的なことについて述べる場合と1回限りの未来について述べる場合とで、「～(ヨ)ウトスル」の許容度が異なる。

6. 1. 1 「～(ヨ)ウトスル」が使われやすい場合

命題内容が恒常的なものである(28)が言えると判断したのは150名中110名(73.3%)であった。

- (28) 「(私は) 携帯でテレビを見ようとするけど、いつも失敗するんだ。」
調査12 (全体：○73.3%、△6.7%、×20.0%)

(28)において話し手は「いつも失敗する」という恒常的な命題内容について述べている。恒常的であるため観察対象となりやすく、許容度が高いと言える。

6. 1. 2 「～(ヨ)ウトスル」が使われにくい場合

(28)は命題内容が恒常的で、許容度が高かったのに対して、(29)は「来週のある時点」という一度限りの未来について述べており、調査対象者全体の許容度は低い。(29)が言えると判断したのは150名中7名(4.7%)であった。

- (29) 「(私は) 来週、練習用のドラムを買おうとするけど、何かいいもの知ってる？」
調査8 (全体：○4.7%、△11.3%、×84.0%)

(29)に対して「テイル」を用いた(30)の許容度は高く、(30)が言えると判断したのは150名中69名(46.0%)であった。

- (30) 「(私は) 来週、練習用のドラムを買おうとして(い)るけど、何かいいもの知ってる？」
調査9 (全体：○46.0%、△16.0%、×38.0%)

(29)に比べて(30)の許容度が高いのは「テイル」を用いているためだと考えられる。「テイル」を用いると「視座」と「注視点」が異なる位置に設定され、話し手自身が観察対象となる。つまり、話し手自身が客体化されるため許容度が上がると言える。

6. 2 従属節の「～(ヨ)ウトシテイル」

ここでは従属節で用いられる「～(ヨ)ウトシテイル」の許容度について、まず調査対象者全150名における結果を考察し、次に世代差が見られた場合について考察する。

6. 2. 1 調査対象者全150名における結果

6. 2. 1. 1 「～(ヨ)ウトシテイル」が使われやすい場合

全20項目中、調査対象者全150名において許容度が高かったのは、(31)～(33)のように「～(ヨ)ウトシテイル」が名詞節、ノダ節、時節において使われる場合である。(31)が言えると判断したのは150名中125名(83.3%)で、(32)は121名(80.7%)、(33)は115名(76.7%)であった。

(31) 「新しい世界に飛び込もうとして(い)る私に何かアドバイスをお願いします。」
調査7 (全体：○83.3%、△10.7%、×6.0%)

(32) A 「ねえ、ちょっといい?」

B 「うん、何?」

A 「(私は) 作文を書こうとして(い)るんだけど、分からないことがあって…。」
調査6 (全体：○80.7%、△7.3%、×12.0%)

(33) 「(私は) 夜中にこっそり、つまみ食いをしようとして(い)る時、風の音がするとドキッとする。」

調査5 (全体：○76.7%、△6.7%、×16.7%)

(31)～(33)は「まさに動作を起こさんとしている」状況であることを従属節の中で説明している。話し手自身について述べる場合であっても、従属節の中で用いられるため命題内容を客体化しやすいと言える。

6. 2. 1. 2 「～(ヨ)ウトシテイル」が使われにくい場合

「～(ヨ)ウトシテイル」の許容度が最も低かったのは(34)で、言えると判断したのは150名中58名(38.7%)であった。

(34) A 「課題終わった?」

B 「ううん。(私は) 早く終わらせようとして(い)るけど、やる気がなくてまだ全然手をつけてない。」

調査15 (全体：○38.7%、△12.0%、×49.3%)

(34)は「～(ヨ)ウトシテイル」が持つ「まさに動作を起こさんとしている」という「努力開始」の意味と、「やる気がなくて」という「努力放棄」の意味がそぐわないため、許容されにくいと考えられる。

(34)の「やる気がなくて」を(35)のように「やってみたら」にすると150名全体における許容度が上がる。

- (35) A 「課題終わった？」
 B 「ううん。(私は) 早く終わらせようとして(い)るけど、やってみたら難しくて進まない。」

調査14 (全体：○70.7%、△10.7%、×18.7%)

(35)のような「努力放棄」の意味が入る場合は許容度が低いですが、過去のある時点における「努力放棄」であれば許容されやすい。

- (36) A 「韓国語検定の申し込み、どうした？」
 B 「結局、郵送で申し込んだ。(私は) 最初、パソコンで申し込みをしようとして(い)たけど、私には難しいかなって思って…。パソコンには一度も触れなかったんだけどね。」

調査20 (全体：○72.7%、△10.0%、×17.3%)

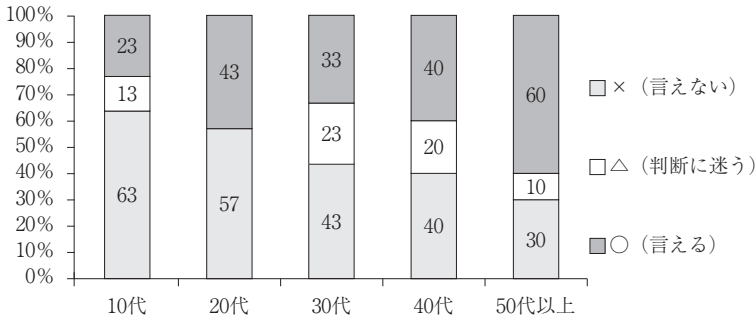
(36)が許容されやすいのは、「過去の私」は「発話時現在の私」に比べて観察対象としやすいからだと考えられる。

6. 2. 2 世代差が見られる場合—主節に近い従属節で用いられる場合—

従属節であっても、いわゆる「言いさし文」として使われる場合は主節に近づく。主節に近い従属節で用いられる「～(ヨ)ウトシテイル」の許容度にも世代差が見られる。(37)が言えると判断したのは、10代は30名中19名(63.3%)であったのに対して、50代以上は9名(30.0%)であった。

- (37) 調査17 (=例3)
 A 「先週貸した本、もう読んだ？」
 B 「ごめん。忙しくて、まだ。(私は) 読もうとして(い)るんだけど…。」

図2 例(37)の許容度



(37)は(38)のような構造をとり、その解釈として (39a) と (39b) の2つの可能性がある。

(38) 私₁は [私₂が本を読むために動作をおこさんとしている] ことを観察した。

(39a) 「視座」は発話時現在の話し手、「注視点」は第三者

(39b) 「視座」は第三者、「注視点」は観察対象である話し手

(37)のように話し手が自分の状況や事情を説明する場合、世代が下がるほど第三者的な立場から述べることによって、聞き手への理解を求めていると思われる。

7. おわりに

本稿は、一人称主語の「～(ヨ)ウトシテイル」について日本語母語話者150名を対象に行ったアンケート調査の結果をもとに考察した。その結果、主節に近い従属節で用いられる「～(ヨ)ウトシテイル」の許容度に世代差が見られた。また、主節で用いられる「～(ヨ)ウトスル」にも世代差が見られた。本稿は、世代が下がるほど「～(ヨ)ウトシテイル」の許容度が上がるのは、世代が下がるほど話し手自身を観察対象にするためであると考え、「視座」と「注視点」が世代によって異なることを主張した。今後は「視座」と「注視点」が移動する条件についても明らかにする必要がある。

注

- 1) 10代は高校生、20代は社会人に限定した。
- 2) 本稿では「～(ヨ)ウトスル」「～(ヨ)ウトシテイル」「～(ヨ)ウトシタ」「～(ヨ)ウトシテイタ」をまとめて「ヨウトスル」形式と呼ぶ。

参考文献

- 池上嘉彦 (2005) 「言語における<主観性>と<主観性>の言語的指標(2)」『認知言語学論考』第4巻, ひつじ書房, pp. 1-60
- 竹村和子 (2004) 「『～ヨウトスル』と『～ヨウトオモウ』の機能の類似と相違－人称を中心に－」『言語と文明』第2巻, 麗澤大学大学院言語教育研究科, pp. 78-90
- 永井鉄郎 (1997) 「『～ようとする』の意味と用法」『日本語教育』92号, 日本語教育学会, pp. 189-199
- 茂呂雄二 (1985) 「児童の作文と視点」『日本語学』第4巻第12, 明治書院, pp. 51-60
- 柳沢浩哉 (1994) 「テイル形の非アスペクトの意味－テイル形の報告性－」『森野宗明教授退官記念論集 言語・文学・国語教育』三省堂, pp. 165-178

謝辞

本稿は2010年3月12日に行われた「銘傳大學2010国際學術研討會」で口頭発表した内容を基としている。貴重なご助言をくださった方へ心からお礼申し上げます。また、調査にご協力いただいた方にも厚くお礼申し上げます。

資料1

調査時期：2009年9月7日～20日

調査項目：全て友達との会話場面

- (1) A 「結局、Bさんは何がしたいの？」
B 「うーん、(私も) 自分がどこへ向かおうとして(い)るのか分からない。」
- (2) A 「お金に困りそうだと思ったらどうする？」
B 「(私は) 節約はしないで、もっと稼ごうとする。」
- (3) A 「すごく疲れた時、どうやってストレス解消するの？」
B 「(私は) カラオケに行こうとする。」
- (4) A 「すごく疲れた時、どうやってストレス解消するの？」
B 「(私は) 無意識のうちにカラオケに行こうとする。」
- (5) 「(私は) 夜中にこっそり、つまみ食いをしようとして(い)る時、風の音がするとドキッとする。」
- (6) A 「ねえ、ちょっといい？」
B 「うん、何？」
A 「(私は) 作文を書こうとして(い)るんだけど、分からないことがあって…。」
- (7) 「新しい世界に飛び込もうとして(い)る私に何かアドバイスをお願いします。」
- (8) 「(私は) 来週、練習用のドラムを買おうとするけど、何かいいもの知ってる？」
- (9) 「(私は) 来週、練習用のドラムを買おうとして(い)るけど、何かいいもの知ってる？」
- (10) A 「明日の登山、Bさんは行く？」
B 「ううん。(私は) 参加しようとしたけど、明日締め切りの仕事を思い出して諦めた。」
- (11) 場面：携帯に電話がかかってきて
A 「もしもし。今、家？ごはん、食べた？」
B 「ううん、まだ。(私は) 今から、食べようとして(い)る。」
- (12) 「(私は) 携帯でテレビを見ようとするけど、いつも失敗するんだ。」
- (13) A 「何してるの？」
B 「(私は) 携帯でテレビを見ようとして(い)るけど、うまくいなくて…。」
- (14) A 「課題終わった？」
B 「ううん。(私は) 早く終わらせようとして(い)るけど、やってみたら難しくて進まない。」
- (15) A 「課題終わった？」
B 「ううん。(私は) 早く終わらせようとして(い)るけど、やる気がなく

てまだ全然手をつけてない。」

- (16) A 「パソコン買いたいって言ってたよね？買った？」
B 「ううん。(私は) 買おうとして(い)たけど、先にデジカメが壊れたから、結局パソコンは買わなかった。」
- (17) A 「先週貸した本、もう読んだ？」
B 「ごめん。忙しくて、まだ。(私は) 読もうとして(い)るんだけど…。」
- (18) 場面：待ち合わせに遅れて、今やってきたBに向かって
A 「どうして遅れたの？」
B 「ごめん。(私は) 韓国語検定の申し込みをパソコンでしようとして(い)たけど、思ったより時間がかかっちゃって。」
- (19) 場面：Bは昨日、パーティーに遅れてきました。
A 「昨日、どうして遅れたの？」
B 「ごめん。(私は) 韓国語検定の申し込みをパソコンでしようとして(い)たけど、思ったより時間がかかっちゃって。」
- (20) A 「韓国語検定の申し込み、どうした？」
B 「結局、郵送で申し込んだ。(私は) 最初、パソコンで申し込みをしようとして(い)たけど、私には難しいかなって思って…。パソコンには一度も触れなかったんだけどね。」